

遅咲きの梅

津村節子

中公文庫

中公文庫 ©1979

遅咲きの梅

昭和五十四年十一月二十五日印刷
昭和五十四年十二月十日発行

著者 津村節子

発行者 高梨 茂

用紙 本州製紙
整版印刷 三晃印刷
カバー トープロ
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八一七
振替東京二―三三四

¥ 四二〇

中公文庫

遅咲きの梅

津村節子著



中央公論社

表紙・扉 白井晟一

遅咲きの梅

一

三月なかばに、思いがけない大雪が降った。

庭一面が真白に覆われ、山吹や夾竹桃などのしなやかな枝は雪の重みで深々と曲り、その先を積った雪の中に埋めている。梅の古木は、書斎の窓から見える位置に差しのべられていた一番いい枝ぶりが折れ、なまなましい白い裂け目を見せながら、皮一重を残してぶらさがっていた。

旅から今夜帰宅するこの家の主の落胆を思い、かなは暫く雨戸を繰る手をやめて、無惨な梅の姿を眺めていた。

朝の仕事が一段落してから、かなは物置からシャベルを出して来て、玄関から門までの敷石の上と、門の前の道の雪かきをした。

榎村家は道路の行き止りにあり、両側に二軒ずつ家が並んでいる。この三十メートルばかりの道は五軒の家の私道なのだが、雪かきをしているのはかなだけであった。到底一人の手には負えず、やむなく半分ほどでやめたが、久しぶりの雪かきに汗ばんで、気持のよい労働だった。

雪は降っても陽射しは春のもので、かなが雪かきした部分は昼過ぎにはすっかり乾いてしまい、白いアスファルトの肌を見せた。が、買物に出かけた折、車の往来の激しい通り以外は、雪がとけ残ってぬかっている。

翌朝、榎村昂は、遅い朝食の食卓に向いながら、

「雪かきしてあったのはうちだけだったね」

と機嫌のいい声で言った。

「かなちゃんが、やってくれましたの」

妻の慶子が、給仕をしているかなをかえり見ながら言った。

「そうか。よく気がついたね」

雪が降れば雪かきをするのは雪国の習いである。そのまま放置しておけば、陽当りのよいところではとけて泥水と化し、一日中陽の当らぬ細い露地などでは、冷え込んで来ると凍りついて危険である。

「東京の人は雪に馴れていないのです」

あたりまえのことをしてほめられたことが面映ゆかった。

榎村家には、中学一年生の真澄と、小学校四年生の紗織という二人の子供がいる。食事は子供たちを学校に送り出してから、夫婦とかなが一緒にすることもあり、今朝のように旅行から帰って来た榎村の起床が遅いときには、かなが先に一人ですませ、夫婦が昼食兼用の食卓に着くこともある。

食後、紅茶をのみながら、

「スーツ・ケースをここへ持って来てくれないか」

と榎村が言った。

かなが書斎からスーツ・ケースを持って来ると、かれは大型のハترون紙の封筒を出して慶子の前に置いた。

「なんですの？」

「写真だよ、例の——」

「ああ、花村さんからのお話の？」

慶子は一瞬かなを見、封筒から引き出した二つ折りの台紙をおもむろに開いた。

かなが、台所へ立って行こうとすると、

「かなちゃん、ちょっとそこへおかけなさい」

と慶子が改まった声で言った。かなはいぶかしく思いながらも、言われるままに食卓の端の椅子に浅く腰をおろした。

「この人、どうかしら」

慶子は、かなの方へ写真を押して寄越した。髪をきちんと整え、ネクタイを締めた男の上半身の写真である。見合写真だ、と思った途端、顔に血がのぼって、かなはその写真を正視出来なくなった。

「これが履歴書と家族書だ」

「次男なのね。親御さんとは同居しないでいいんでしょう？ このせつ、次男というのは少いのよ。大概子供は一人か二人しか産まないから、二人男の子がいる家って珍しいですものね」

「しかし、かなちゃんなら姑さんのいる家でもつとまるよ。他人の家のめしを食っていたんだから」

「まあいやだ。私が姑さんというわけ？ でも姑さんと私とは違うわ。反目するものが全然ないもの。姑さんはお嫁さんに、大事な息子を奪われたという嫉妬があるし、お嫁さんにしてみれば、母親だからと言って、結婚した息子にいつまでもかかわって貰いたくないという気があるし」

「知ったようなことを言うね。姑の苦勞もしたことはない癖に」

「そんなことはわかってるわよ。姑さんは家のことについてはこれまで自分がして来たように嫁にして貰いたいし、お嫁さんは、自分には自分の考えがあるのだから家事も育児も余計な口出しはごめんだ、という気持があるし——」

「嫁と姑の話はいいから、とにかくこの青年をどう思う？」

「どう思うって、写真だけでは何とも言えないわよ、ねえ、かなちゃん」
かなは、当惑してうつむいていた。

「どう思う、というのは、会ってみる気があるかどうかということだ。無論人物については写真だけではわかりはしないよ」

「真面目そうな感じね。でも見合写真って改まりすぎちゃって、よくわからないわね。ほんと

スナップのほうがいいんだけど」

自分の縁談なのに、かなはひとごとのような気がして少しも関心が湧かない。旦那さまは折れた梅に気づかれただろうか、などと思っていた。

「会う気があるなら、見合の機会は作るよ。花村くんがこの間来たとき、きみのことを気に入ったらしくてね。この青年は花村くんの甥にあたるんだそうだ。年は三十二で、かなちゃんにちょうどいいと思うんだが——」

「でも、三十二にもなって、相手を自分で見つけられないんですかねえ」

「大変真面目で、つきあっている女友達もないんだそうだよ」

「そういうの、真面目って言うのかしら。少しおかしいんじゃないやありません？」

「おい、おい、変な先入観を植えつけるんじゃないよ」

榎村が、妻をたしなめた。

「今晚でもゆっくり考えなさい。気がすすまなければ、遠慮しないではっきりそう言えがいいのよ」

「しかし、チャンスは逃さぬほうがいいな。会うだけでも会ってみて、返事はそれからいいんだよ」

かなは礼をのべ、写真と履歴書を自室へ置きに行った。

夜ゆっくり考えなさい、と言われたが、さすがに少し気にかかって開いてみた。髪を七三に分け、黒い縁の眼鏡をかけたごく平凡な男である。眼鏡というものは、人の顔を類型化するのも

しれないが、それにしても、この男がもし犯罪をおかし、目撃者がモンタージュ写真を製作するのに協力しようとしても、特徴が掴みにくいのではないだろうか。

無論写真の人物は、悪事を働くような人相ではなかったが、写真館で写した見合用の写真のせいか、ひどく緊張していて、男の性格の片鱗さえも掴めない。もっともかなは、見合をする気は毛頭なかった。それでも写真が気になるのはなぜだろう、と自分で自分の気持が計りかね、それを机の上に置いて急いで台所へもどった。

かなは、あと一月足らずで二十七歳になる。福井県鯖江の在からこの榎村家へ家事手伝として来たのは、四年前の二十三歳のときであった。二十三ともなると田舎では婚期の遅れた娘として、何となく肩身が狭い。

しかしかなには三人の弟妹たちと中気の祖父がいて、母が数年前に病死してからは主婦代りであった。縁談がなかったわけではないが、すぐ下が弟で家事をまかせられないし、妹がせめて中学を卒業するまでは、寝たきりの祖父を置いて嫁に行くことは出来なかった。

かなが二十三歳になった春、祖父が死んだ。父は、それを待っていたように、女を家に入れた。母の死後、父にそのような女がいるらしいことはかなも薄々感づいていたが、まさか家へ入れるなどとは考えていなかった。

近くの町の小料理屋に勤めていた女で、若づくりだが四十歳は過ぎているように見え、白粉やけした肌と、酒で潰しでもしたのかと思われる荒れた声がいかに水商売上りという感じで、さ

すがに父も祖父の手前をはばかっていたのだろう、とかなは思った。

だが、女が来ると、父は折あるごとになかなに向って、

「これまでおめに苦勞ばっかかけて来たけど、もういつでも嫁に行ってもいいんやで。いい話があつたら、どこへかて行ってもいいんやで」

と言うようになった。

女は、寝たきりの年寄の世話をするのを拒んでいたのだろう。考えてみれば、女を家に入れることを遠慮するような父ではない。祖父の死を待っていたのは女自身であり、祖父が死んでしまえば、かなはただ目障りな存在でしかないのだった。

父と女は、しきりに結婚をすすめるのだが、具体的に縁談を持って来てくれるわけではない。かな自身、祖父と弟妹たちの世話に明け暮れていた毎日で、男と知り合う機会もなかったし、娘の身で、縁談を頼みに歩くわけにはいかない。

そんな折に、女性週刊誌の求人欄に、槇村家を出したお手伝募集の記事を見たのであった。

へお手伝さん求む。当方大学教授、家族四人、テレビ付個室、健康で真面目な方、年齢不問、要写真、履歴書

かなは、中学校を卒業しただけだが、家事手伝なら学歴も資格もいらぬ。年齢不問と書き添えてあるのも有難かった。健康ならば自信がある。生れてこの方、風邪以外に病氣らしい病氣をしたことはない。

ただ、大学教授などという偉い人の家庭に、自分のような田舎者が勤まるかどうか自信はない

が、どうせ数多い応募者の中から自分などが選ばれる筈はない、と殆どあきらめていた。

学校の入学式、卒業式の記念写真以外に、写真など撮ったことのないかなは、適当な写真を持ち合わせていなかったので、町の写真館まで行き、履歴書用の写真を撮った。カメラの前で緊張したかなは、フラッシュに驚いてまたたかぬよう、懸命に眼を見開いていたので、出来上った写真は、口を一文字にひき結び、びっくりしたように眼を見張っていた。

往復の旅費を送るから、面接に上京するようという女手の達筆な手紙を貰ったとき、かなはむしろ萎縮した気持になった。

東京へはまだ行ったことがない。県外に出て行かなくても職場はいくらでもあった。

福井県は繊維工業が盛んである。奈良時代から税として、羅、綾、白絹等を納めていた絹織物の産地で、戦国時代には軽物座^{かろものざ}という絹織物の売買権を独占する組合もあった。代々の福井藩主たちは富国政策として養蚕織物を奨励し、技術的開発に力を注いでおり、明治初年にすでにバタン機を購入している。その後も旧藩士らが中心となって織物会社を設立するなど、個人経営の家庭工業から脱して、諸外国にフクイシルクを輸出するほどの発展を見た。

第一次大戦後の不景気に、輸出向け絹織物業者は大打撃を受け、内地向けや、人絹織物に転業するものが続き、昭和にはいって福井は人絹の世界的大産地に飛躍した。日本の国策の一つの柱が、人絹輸出と言われたほどである。

太平洋戦争、大地震、朝鮮動乱等の激浪をかぶりながら時代時代に即した織物を織り続けて来た福井は、現在も絹織物の他に、トリコット、編レース、ベルベット等の多種多様な織物を生産

しており、リボン、テープ、マーク、畳べり等の細幅織物は、全国の八十パーセントを占める大産地である。

また鯖江市周辺は伝統工芸も盛んで、千四百余年の歴史を持つ越前漆器や、竹細工、越前瓦などが生産されている。明治の頃に始められた眼鏡フレームは、日本全国の生産高の八割以上を占めるに至っており、多くの人手を必要としていた。

だが、かなは地元就職したくはなかった。父と父の女の棲むところから出来るだけ遠くへ行きたかった。都会ならば二十三歳でまだ未婚の女性も多く、婚期など気にせず暮せるだろう。結婚の相手も見つかるのではないか――。

そんな期待もなかったわけではない。

上京して真先に聞かれたのは、

「あなたはすでに適齢期なのに、どうして今更東京へ働きに出る気になったの？」
ということだった。父が水商売の女をひき入れたので家にいづらくなって、とは言えず、
「嫁に行くあてもないもんですさけ」

とかなは言った。

「縁談はあるんでしょう？」

「まえはありましたんですけど、もうのうなっしてしもたんです」

「もう、って、まだ二十三じゃないの」

「ほんでも、田舎ではみんな早いもんやさけ」

「うちはね、少くとも二年は勤めてほしいのよ。一年は見習期間のようなものでしょう？ 役に立って貰えるようになるのは、それからですもの」

「はい」

「その点、もっと年の若い人のほうがいいかと思ったんだけど、主人も私も、なんだかあなたが一番気に入ってしまったてね」

一番気に入った、と言われて、かなは、そんなに期待をされては困る、とうつぶいた。

その当時から、慶子が趣味で織っていた手織の毛糸織物は次第に認められるようになり、いまではデパートの高級婦人服売場の一隅に置かせて貰えるようになっていた。仕事に追われて家事は殆どかなにまかせきりという状態だった。だが慶子は、自分の都合ばかり考えているわけにもいかない、と間もなく二十七になるかなの縁談に本腰を入れる気になったのであろう。

かなは、その日仕事が終わってから、もう一度写真を眺めた。いくら眺めても、この写真からは何もわからない。

履歴書には、丸一産業株式会社の経営者の次男で、本人も父の会社に勤務しているとある。会社経営と言っても、税金対策のため、八百屋でも、洋品屋でも株式会社として家族が社員になっている場合もある。丸一産業がどんな会社かわからないが、長男も同じ会社に勤めているから、小さな個人商店のような気もするが、それにしてもかなは、まず経営者の息子であるということにこだわるものがあつた。

当人が一流とは言えぬまでも、かなも名を知っている私大を卒業していることにも引け目を感じ

じた。義務教育は中学校までだが、最近は高校へ進学する者が圧倒的で、高校が義務教育化した感すらある。その上女子でも、短大、大学に行く者が少くない。中学しか卒業していないかなは、肩身が狭かった。学校は好きだったし、成績も比較的よかったほうだったので、高校へ進む友達が羨ましくて、卒業の日、かなはひとり床の中で泣いた。初めからあきらめてはいたが、それでも希望の高校に合格したクラスメートたちの喜びを見るのはつらかった。学校へ行けなかった恨みは、いまもかなの心の中にくすぶっている。

「あの、せっかくのお話ですけれど」

翌日かなは、男の写真と履歴書を慶子に返した。

「あら、気に入らなかった？」

「いいえ、気に入らないなんて！ 私には勿体ないお話です。あんまり家が違いすぎて、私ではとてもつとまらないと思います」

「まあ、家が違うなんて、かなちゃんたら古めかしいことを言うのねえ」

慶子は笑った。

「いいえ、家が違うということは、うまくいかないことが多いと聞いています。私の友達は、大阪の工場へ働きに行っていて、恋愛結婚したんですけれど、旦那さんがなにげなく食べたいと言うものがわからなくて、そしてそれが一度や二度ではなくて、とうとう離婚してしまっただけです」

「まあ、わからなければ、聞けばいいじゃないの。夫なんだから、恥かしいことはないでしょう」